陳舜臣さんを語る会通信

NO.46　Sep.　2021

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2021年9月10日

明清交替期の中国を舞台に北の呉三桂（ごさんけい）、南の鄭芝竜（ていしりゅう）を中心に描く『風よ雲よ』

初出は、北海道新聞、1971年6月15日～72年6月27日夕刊連載です。単行本では中央公論社(1973年)があり、文庫版では講談社文庫(1985年)、中公文庫(1999年)があります。集英社『Who is 陳舜臣』第13章「著作目録」の『風よ雲よ』の一行コメントに「明朝末期、半盗半商の大頭目鄭芝竜は南海制覇の野望に燃える」とありましたので、てっきり、鄭芝竜が主人公とばかり思っていました。お読み下さい。（編集委員　橘雄三）

講談社文庫本
尾崎秀樹氏の解説から抜粋・引用
傍線は編集委員の加筆

歴史ロマンとしての味を楽しませてくれる

陳舜臣は日本で生まれ、日本で暮らす中国人として、日中両国を架橋する意識にもとづき、中国史に材をとった歴史小説や日中交渉史をあつかった作品を数多くまとめてきた作家である。彼には「阿片戦争」をはじめ、「江は流れず」「小説日清戦争」「太平天国」など、中国の近代史に取組み、豊富な史料を駆使して、作者自身の民族的課題に肉薄した大作があり、それらの丹念な仕事には、講史家としての彼の一面がしめされている。

だが中国の古典をあつかったものや、中国史上で日本とも関係のふかい人物の事蹟や事件をとりあげた諸作の中には、それらを背景としながら、作者のゆたかな空想力を加えて、歴史ロマンとしての味をたのしませてくれるものが少なくない。近松門左衛門の「国性爺合戦」でひろく知られた鄭成功やその父の鄭芝竜を中心に描いた「風よ雲よ」と「旋風に告げよ」も、そうした作品の中にふくまれる。

講談社文庫版表紙

鄭芝竜の登場する「風よ雲よ」につづいて、鄭成功の活躍する「旋風に告げよ」を書いたことで、作者は日本人にもなじみぶかい鄭父子を、中国史の中に位置づけたのである。

この執筆の順からみても、「風よ雲よ」と「旋風に告げよ」が二部作としてまとめられたことはあきらかだが、鄭父子以外の登場人物はことなっており、それぞれ独立した長編とみることもできる。ひとつには成功にくらべて父の芝竜の事蹟に関する史料が少いため、「風よ雲よ」ではその部分を作者が想像で補い、芝竜よりも脇役である虚構の人物を、主人公の位置にすえたものと思われる。

一度、訪れてみたい平戸

鄭芝竜は、顔思斉の跡を継いで首魁となり、ライバルの海賊をつぎつぎに倒し、南海の覇者の地位を得た。

彼が平戸藩滞在中に住んだ家は、現在の喜相院だといわれており、香炉や印判などの遺品がそこに伝えられ、後に松浦家に寄託され、今では松浦史料博物館に保管されている。芝竜は各地を転戦しながらも何度かその家へ立ち寄り、妻子と出会ったらしく、平戸藩の足軽、田川七右衛門の娘との間に福松が生まれ、五年後には、次男の次郎左衛門も生まれている。次郎左衛門は芝竜の妻が大陸へ渡ったおり、日本に残って、祖父の名を継いだ。

芝竜の略歴は明に降った一六二八年以降主として鄭成功との関連で伝えられている。だがその事蹟は不明の部分が多く、中国側の史料をあわせ読んだ陳舜臣はかえって種々相違点に悩まされたのではなかろうか。

架空の人物が活躍し、又、女性の活躍が物語に彩りをそえている

宣吉や千海のほかに虎之助の妻となって彼と別々に行動するお絹や、呉三桂の愛人の円円などの女性たちが物語に彩りを添えている。

この作品は、鄭芝竜よりも安福虎之助の活躍にウエイトがおかれている。芝竜の息子成功も後半では主要な動きをみせており、そのあたりは「旋風に告げよ」とかさなる。

■画像は「松浦史料博物館」　同館HPより

『風よ雲よ』概略＆主な登場人物

［中公文庫版『風よ雲よ』キャッチコピーより］

上巻　明朝末期の1623年、ポルトガル商館や倉庫が建ち並ぶマカオ南湾。大坂夏の陣の落武者、安福虎こと安福虎之助は、のちの南海の大立者鄭芝竜と出会った…。生き甲斐と夢を求め、大動乱前夜の大陸へと躍り込んだ男たちの運命を描く歴史長編。

中公文庫版(上)表紙 →

下巻　満州鉄騎軍は山海関に迫り、農民反乱軍の首領李自成は西安で大順国を建国、大軍を率いて北京を包囲した…。明末清初、激動期の大陸を舞台に、安福虎之助、豊太閤の後裔、呉三桂、陳円円ら、宿命を負った男女の愛と夢想が交錯する壮大なロマン。

中公文庫版(下)表紙 →

主な登場人物

●**安福虎之助**　中国名安福虎。大坂夏の陣のおり大坂方に属し、敗れてマカオに渡り、絹商人周弘の用心棒となる。豊臣秀頼の遺児と信じられる宣吉を生き甲斐に大陸で流亡生活を送る。

●**中橋鉄之進**　大坂方の武士。マカオで豊臣家の遺児の秘密を虎之助に言い残して死ぬ。

●**鄭芝竜(ていしりゅう)**　国姓爺鄭成功の父。顔思斉の後継者として福建に勢力を張り、南海を制覇、帰順して明の都督(軍の最高位)となる。

●**顔思斉(がんしせい)**　平戸で裁縫を業としていたが、平戸と台湾を拠点とする半商半盗の大海商団の首領となる。

●**黄程(こうてい)**　鄭芝竜の母の兄。マカオで船頭行(船主と貿易商を兼ねた店)を経営する。

●**大念和尚(だいねんおしょう)**　彭延と称し明国軍の四天王の一人だったが、坊主となる。豊宣吉の養い親。明朝の前途を案じ、皇統をひく宣吉を豊臣家の遺児に仕立てかくまう。

●**豊宣吉(ほうせんきち)**　大念の手で眉と眉の間に赤い痣をつけられ、豊臣秀頼の遺児として育てられるが、自分では自分の出生の秘密を知らない。

●**周弘(しゅうこう)**　蘇州の絹商人。政財界に隠然たる力を持つ。

●**お絹**　摂津屋の息のかかった麻薬の運び屋。虎之助の妻となるが、紫禁城入りを夢み、それが叶い、長平公主付きとなる。

●**摂津屋幸兵衛**　カトリック信徒。麻薬を扱う武家あがりの商人で、海商として東アジアを制覇し、神の御名による独立王国建設を夢みている。

●**お多喜**　平戸松浦藩士田川七左衛門の娘。鄭芝竜と結ばれ、福松を生む。

●**福松(ふくまつ)**　中国名鄭森。のちの国姓爺鄭成功。父親とはやや立場を異にし、明朝復興に力をつくす。

●**劉天馬**　顔思斉に対抗、甲螺の座をねらうが、和歌原群蔵らに斬られる。

●**和歌原群蔵(わかはらぐんぞう)**　豊臣秀頼の特務機関であった千成組の首領。鄭芝竜の海商団にあって、密かに摂津屋一味と結び、南海制覇をねらう。

●**李自成(りじせい)**　宿場人足あがりの流賊。蜂起し北京を陥し、帝位につくが、たちまち、呉三桂らに追い払われる。

●**宛君(えんくん)**　南京の名妓。

●**花房権右衛門**　平戸藩士で二刀流の達人。宣吉に読み書きを教え、武術を指南する。

●**呉三桂(ごさんけい)**　山海関を守る明朝の将軍。呉三桂がいなければ清は中国本土に君臨できなかったであろうといわれる。清入関後、四川と雲南の藩王に封じられる。のち、清朝に叛くも病死。

●**呉襄(ごじょう)**　呉三桂の父。万暦帝時代、明国軍四天王の一人。

●**陳円円(ちんえんえん)**　蘇州の名妓。呉三桂の愛妾となる。明朝滅亡劇のヒロイン。

●**王千海(おうせんかい)**　眉と眉の間に赤い痣のある謎を秘めた女装の手品師。

●**崇禎帝(すうていてい)**　明朝最後の皇帝。紫禁城の裏山で自縊。

●**長平公主(ちょうへいこうしゅ)**　崇禎帝の長女。父の刃で負傷するも…。

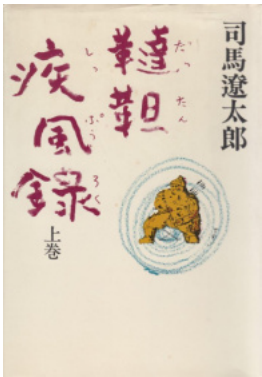
●**費貞娥(ひていが)**　長平公主付きの宮女。公主の身代わりになり捕われる。

■画像は shukousha.com より
山海関の城壁から鎮東楼（天下第一関）と長城を遠望

呉三桂と陳円円、司馬遼太郎の『韃靼疾風録』も併せて読んでください

明末、万里の長城の東端、山海関を守る明の武将、呉三桂と美妓陳円円との出会い、呉三桂の円円への執着については、多く語られてきました。『風よ雲よ』で陳舜臣さんは、鄭芝竜の話よりこちらに、より多く紙幅を割いています。この箇所について、『韃靼疾風録』の記述を下に抜粋引用します。両者を併せ読んで下さい。執筆は、『韃靼疾風録』の方が『風よ雲よ』より十数年遅い。

■『韃靼疾風録』は司馬遼太郎、最後の長編小説。17世紀、清朝興隆の時代を舞台に東アジア世界に展開される雄大な長編ロマン。韃靼とは、モンゴル系の一部族、タタールの通称。ここでは女真族(満州族)のこと。『中央公論』に1984年1月号から1987年9月号に連載。第15回大佛次郎賞（1988年）を受賞。



中央公論社版表紙 →

《陳円円、皇帝は一顧もせず呉三桂の側室に》

福良弥左衛門は、陳円円が幼女であったころから知っている。彼女は蘇州の石畳の上にほうりだされた孤児にすぎなかった。

円円という娘をやしない、やがて妓楼がその娘に目をつけると、手ばなした。妓楼は円円をひきとって諸芸を仕こんだ。

やがて陳円円が成人して蘇州第一の名妓といわれるようになると、円円に不思議な運命が舞いおりてきた。周嘉定伯という老貴族が、陳円円に目をつけたのである。

周嘉定伯（名は周奎）は、蘇州の出で、官僚の出身だった。その娘が毅宗皇帝の皇后になったために宮廷人になり、皇帝の岳父としてあがめられるようになった。

周老人にとっての関心は、宮廷での自分の勢力をふやし、皇帝を掌中におさめて威福をえたいという一事しかなかった。そのためには、自分の娘が寵せられねばならないが、毅宗のほうは、周老人のてのひらに乗らなかった。皇帝は田貴妃という宮女を愛して皇后にはつめたかったのである。

この場合、周老人として打つべき手は一つしかなかった。皇后の身辺に私的な奴隷として美人を配し、毅宗の目にとまらせ、その寵をうけ、淑女の位にでも登らせるべくしむけることであった。もしそうなれば、その淑女の主人である皇后の勢力が大いにあがり、ひいては皇后の実家の周家の威福にもつながる。

周嘉定伯は妓楼と取引して陳円円を大金であがなった。ところが、皇帝は彼女に一顧もせず、彼女は宮廷から出ざるをえなかった。

彼女はいわば落魄したまま周嘉定伯の邸内で起居した。「せっかくの買物が、むだになった」

北京が大崩れにくずれる前に、宮廷で大きな行事があった。毅宗皇帝が、前線の司令官たちをよろこばせるべく、幾人かに伯爵をあたえたということである。呉三桂も、遼西の最前線である寧遠城から北京にもどってきて、居庸関をまもる唐通や左良玉、黄得功ら三人とともに宮廷の儀式にくわわり、爵位をうけた。

そのあと、新伯爵のために、ほうぼうで祝宴が催された。周老人も「平西伯」の称号をえた呉三桂をその邸にまねいた。

席上、主賓の呉三桂は、陳円円を見た。そのあと、気もそぞろになった。

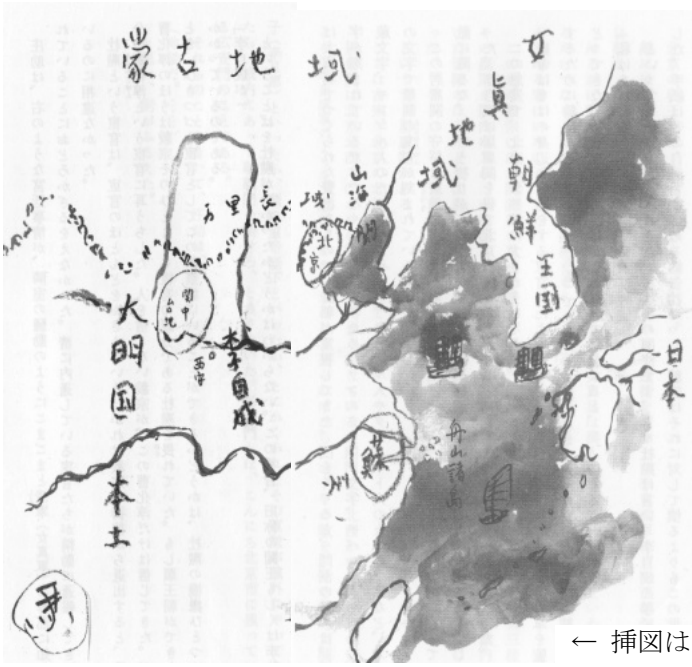
（この世に、これほど美しい女がいたのか）

周老人はどうやら呉三桂が陳円円に関心をもったらしいということに気づくと、円円に琵琶を弾じさせた。陳円円は、主賓である呉三桂にむかって一礼し、琵琶をとりなおし古詩を弾じはじめた。

秦時の明月、漢時の関
万里長征、人未だ還らず
但、竜城の飛将をして在らしむれば
胡馬をして、陰山を度らしめざるを

唐の王昌齢の詩で、辺境の異民族をふせぐための従軍の労苦をうたったものである。

吟じ手の陳円円は胡馬を女真軍であるとし、飛将軍を呉三桂になぞらえた。しかもこの将があるかぎり山海関のまもりはかたい、という意味を寓したのである。



← 挿図は司馬遼太郎

掲載紙 北海道新聞の連載予告記事(1971.6.12)及び連載第1回(6.15)

次の夕刊小説

夕刊連載中の小説『おれの足音』は十四日で完結。十五日から『風よ雲よ』が始まります。作者は中国ものを素材にして、ユニークな作品を書き続ける陳舜臣氏です。

『風よ雲よ』は十七世紀の日本と中国を舞台にし、『八幡船』『和寇』が活躍する痛快な"海洋歴史小説"です。ご期待ください。さしえは光風会会員の御正伸氏です。

風よ雲よ

作 陳舜臣

画 御正伸

作者のことば

大坂落城のあと、日本では徳川幕府体制がしだいに安定しつつあったころ、隣の明（みん）国は末期的症状を呈し、やがて東北から進攻してきた満洲豊団に滅ぼされることになる。当時、日中両国間の通商をほとんど独占し、南海の制海権を握っていたのが、有名な国姓爺鄭成功の父鄭芝竜（てい・しりゅう）であった。十九歳の鄭芝竜がマカオから日本行きの船に乗り、その波乱に富んだ人生のスタートをはじめるところから、この小説は書き出される。夏の陣の落武者で、おのれの人生を夢にしか託せないロマンチストの日本武士が、この鄭芝竜とからみ合いながら、明国滅亡というきびしい現実の立会人になる。

舞台の広さだけでなく、いろんな意味で、できるだけ気宇広大な小説を書いて、読者の情緒に楽しんでいただこうと思う。

国家のことば

陳氏とは短い作品の上で何回かおつき合いしたことがあり、同氏のユニークな作風と、中国と日本の交流を描き続ける意欲に敬意を表していますが、新しい風俗を描いていくつもりです。

同氏の新聞の連載小説を担当するのはこれが初めてです。

風よ雲よ (1)

陳舜臣　御正伸画

マカオ南湾（一）

明の天啓三年（一六二三）は、日本の年号でいえば元和九年にあたる。

五月のマカオ。――ひろい田園だから、熱帯のこの町は、初夏の大自然に照りつけられていた。

ポルトガルの商館や倉庫のならんでいるマカオ南湾の通りを、奇妙な三人組が歩いていた。先頭の男は長身で、色は抜群に白く、明がひどくくぼんでいる。三十をすぎているようにみえたが、眼の表情が意外に初々しいので、あるいはもっと若いかもしれない。

頭におかった朋国ふうの編笠や、身につけたゆったりした服が、この男にはなにとなくそぐわないかんじだ。ときどき右手の甲で額の汗を拭くついでに、ひょいとふりかえる。

五メートルほど離れて、二人の連れが歩いているのだった。

一人は青々と頭を剃った、四十がらみの坊主である。頭ばかりでなく、ひげの剃りのこもみなどに青い。墨染めの頭巾（こいん）の長い袖を、歩くたびに微風に振りあげる。

そのうしろを、十歳ばかりの利口そうな少年が歩いていた。

「こっち、だ」

と、先頭の長身の男が言った。

石造りの倉庫の陰で、中国ふうの建物の前である。門の上には、帆船四隻浮彫風（帆を張れば四隻は浮らかんだ風）

という額がかかっていた。

長崎マカオにふえた『船・通行（ンタウホン）』という店の一つである。いまのことばでいえば、船主と貿易商を兼ねたようなものだ。

船を出すにせよ、外国へ貿易に行く、だが、当時のことだから、海賊の危険が大きく、ひろん保険会社のようなものもない。だから、自分の持ち船でも、ぜんぶ自分の商品を載せることは滅多に、あまりしない。

大きいからだ。したがって、ほかの貨物商の保険にもかなりのスペースを割き、自分の商品の一部もほかの人の持ち船に積む。そんなふうにして、危険を分散したのである。

商品のほかに、その資金、あるいは利潤があれば乗客ものせる。

長身の男が二人の連れを待ってから、一緒に入っていった店は、赤湾（りきょく）という男の経営している船運行であった。

「広福虎（あんふっこ）」と呼ばれた男、曾逕（こうていし）さんの紹介で、日本行きの船に乗せてもらう。ぜんぶで三人じゃが、話はもう通じているはずだ。

言葉づかいはぶっきらぼうで、しかも土佐の訛りではない。

「あんたは江南だろう？」

一般商人にいたる若い男は、乗客を睨みつけ、ちょっとしてから、そう言った。各地の人間を観察する商人なので、長くやっていると、言葉をきいただけで相手の出身地がわかるのだ。

「さよう、江南の新州にいた」

安福虎と乗った男はそう答えた。

「やっぱりねえ」

若い客頭は肩をすくめた。

「言い当てたので、いささか得意」

そのとき、うしろから声がかかった。

「客人は新州においでになったのはたしかでしょうが、ずっとそこにおられたわけじゃない。その前はもっと遠いところ……さて、どちらでございましょうかな？」

血色のよい、ぴっぷりした男が立っていた。

季節があわずに綿入れの長衣を着ているところをみると、店のあるじの李趙であろう。

『風よ雲よ』補足

故宮の裏山、景山に「崇禎皇帝自縊処」の標識

『風よ雲よ』「黄の旋風」の章に、

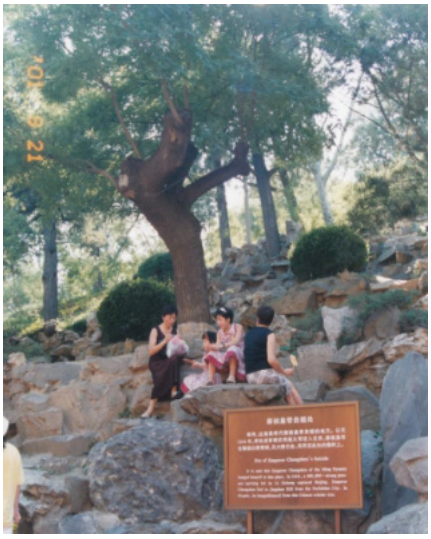
李自成軍は明都北京を制圧した。

明国皇帝は、万歳山寿皇亭に縊死し、それに殉じたのは宦官の王承恩一人だけである。

とあります。紫禁城の裏山（土を盛った人工の山）は今は「景山」と呼ばれ北京ツアーをすると、故宮が見渡せるこの場所へ案内されます。

右の写真(編集委員撮影)の標識の文言を訳します。

ここは、明代崇禎皇帝自縊の場所である。1644年、李自成率いる農民起義軍が北京に攻め入ると崇禎皇帝は、慌てふためいて紫禁城を逃げ出し、大勢はすでに去ったと見、この槐で自縊した。



万歳山■明の永楽十四年(1416)、宮殿を建築するために、元代の宮城を取り壊し、紫禁城の護城河を掘った時に出た残土を積み上げて造り、万歳山と名付けた。